



# アゴラ

鶴見大学図書館報



アゴラ — 鶴見大学図書館報 —  
第138号 2012年9月18日発行  
編集・発行 鶴見大学図書館  
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3  
<http://library.tsutsumi-u.ac.jp/library/>

## 門も叩かず

水井路子

「二年生になったらね」と、上級生は、おいしいものをお裾分けするような口調で言った。七十余年も前のことである。その時の私は東京女子大学国語専攻部予科生。名前は女子大学だが、当時の日本では女子の大学の設置そのものすら認められてはいなかった。

それでも敢えて高等学部から大学部へのコースがここでは作られており、僅かながら大学部の学生もいたが、併設されていた専門課程（国語・英語・数学）に学ぶ人々々が中心を占めており、私もその一人だった。

入ったものの何をどう勉強するのも解らない私に、上級生はやさしかった。彼女の説によると、本科二年になると、I先生の『源氏物語』の講読があるのだそうだ。もちろん予習もしていかなければならず、指名されれば原文を読みあげ、ひと通りの通釈もしなくてはならないが、その後にはI先生の御講義があり、さらに続けられる解釈、鑑賞が絶妙なのだという。

「むずかしい古典だけれど、先生のお話は物語の愛の世界の機微に触れて『源氏』ってこんなにおもしろくてすばらしいものなのかと、解らせてくださるのよ」

国専に入ってよかったと思うのはこの時、と言いながら、上級生は、「それには『湖月抄』くらいは用意しておかなくちゃね」と付け足した。

では早速、と『湖月抄』を買いこみ、その日を待ったが、ああ、

なんと、『源氏』の御担当はI先生ではなかった。退職されたわけでもないのだが、時間割の都合からか、N先生の御講義を伺うことになった。いささかがっくり、しかもいざ始まるとN先生は一字一句を大切になさる方なので、一時間に数行しか進まない。一年かかって読みあげたのは、五十四帖のうち、ほんの数帖。かなりうんざりしたことが『源氏』離れのきっかけになり、卒業する時『湖月抄』はさばさばと同窓会に置いてきた。戦争中でもあり、古典関係の図書は手に入りにくい状態だったから感謝はされたが、貰い上げた後輩は、「あら、この先輩勉強不足。書き入れもあまりしていない」と呆れたことだろう。

しかしN先生の緻密な御講義は実は有難いものだった。数年後思いあって家にあつた『源氏』（古い古典全集で良質なテキストではなかったが）を手にとってみたら、なんと楽に読めるではないか。N先生に改めて感謝申しあげたのはこの時だった。

が、読めたということは、直ちに理解には繋がらない。ましてや、最初から心を震わせるほどの感動を与えられるのは稀なのではないか。私の理解力も足りず、なんとなく読み終わっただけに過ぎなかった。それどころか、以来、少しずつひねくれた見方をするようになったのは、私の性のなせるわざか。

例えば、気になったのは「いとあはれなり」の多すぎたこと。時には別の言い方ができないものか、などと心中文句をつけたり。またいかにも「無常の世界をこんなに理解していますよ」と言いたげな才女ぶりに顔をしかめたり。『源氏』『源氏』ともてはやされる声が昂まる時でもあったので、かえって頑なになったのかもしれない。

多分それは当時の貴族たちの日記に興味を持ちはじめた頃だっ

たかと思う。彼らの権謀術数の裏表が解つてくると、殺しいこそ無かったが、それだけに手が込んでいて、いわゆる『源氏』風の王朝絵巻とは全く異質な、優雅なる冷酷に満ちた世界がそこにはあった。

『源氏』にそれを書けと望むのではないが、少なくとも『源氏』への賛歌が、当時の現実を見据える力を薄めたのではないか、などと勝手なことも考えた。そのころだろうか、臆面もなく奇説珍説を思いついたり、語ったりもした。例えば「いとあはれなり」がやたらに出てくるのは、彼女がかなりの近眼だったからではないのか、などと。彼女には、しつかりものを見定める視力がなかった。これに比べると清少納言は視力二・〇か。鳥の眼の動きまで捉えている……

しかし、あるとき、はつと気づかされた。女子大のころ、親友の一人は近視だったが、歩いていて向うからすてきな人(主に男性)が来ると、眼鏡をわざと外すのだという。「そうすると、もっとすてきに見えるのやわ」と彼女は言う。当時視力一・五だった私は、彼女が自在に二つの世界を使いわけることには感嘆した。そして今になって気がついた。彼女は、そのとき、紫式部の「いとあはれなり」を身体で実感したに違いない、と。

「いとあはれなり」は平板な、突込みの足りない表現ではない。感動を体全体で受けとめ、式部独自の美意識を、わざと覚束なげな言葉に託して書き残したのではないか。ふと『湖月抄』が思い出された。読み返すべきなのに、と思った折も折、別の友達から手紙が来た。『湖月抄』を読了しました、と。八十の半ばを過ぎて、このすばらしさよ。私は結局『源氏』の周辺をうろつくだけで、その門も叩いてはいないのである。

### 薄様刷特製本『湖月抄』

日本文学科 教授 高田信敬

『源氏物語』享受史上最も広く読まれ、深甚の影響を与えた書物は、北村季吟(一六一四～一七〇五)の『湖月抄』であろう。延宝元年(一六七三)より幕末明治に至るまで出版し続けられ、至極ありふれた書物、と見られている。しかし通帯過眼に及ぶものは、表紙の注に埋木の施された次印本<sup>①</sup>であり、未修正の先行刊本<sup>②</sup>これとて真に初印本と言えるか否か決定的ではない<sup>③</sup>はきわめて稀、他にも種々の変わり種が存し、薄様刷特製本もその一つである。

紺色羅表紙縦三〇・四、横二二・七糎の中央に金銀揉消散らし絹地題簽縦二〇・六、横四・九糎を押し、「湖月抄 表白 年立上下 雲かくれ 系図の如く所収内容を墨書 見返しに金銀揉消散らし斐紙を用いる。普通の美濃版より一回り大きい堂々たる書品 表紙・題簽見返し・紫の角共に贅沢な作りである。表紙に出損若干、補修済み。表紙と本文料紙とは虫穴が一致しないので、改装 各帖ごとに紫色斐紙一葉を隔てとして綴じ込む。全六〇帖仕立てと推されるが、数帖分を合冊し、現在の二一冊となった。

各冊末尾左下に「雲邸文庫の朱文印を押し。善本稀書の収集を以て聞えた雲村和田維四郎<sup>④</sup>の旧蔵である。蔵書印の位置から見、現在のように合冊されてからの押捺であろう。すなわち和田維四郎の所有となる以前に、改装されたもの。

本文は埋木修正済みの後印本、その意味では普通の『湖月抄』である。しかしよく見かける楮紙刷本とは使用料紙の厚さに差があり、薄様刷本第一冊と同じ内容の楮紙刷本は、六冊に及ぶ(図版参照)。

江戸時代には薄様を用いた特製本が、顧客の注文に従って限られた数だけ作られており、掲出の『湖月抄』もまた、しかるべき豪商もしくは貴頭の要請に応じたものであつたろう。

(1) 一行文の追加訂正を山岸徳平が指摘(旧日本古典文学大系『源氏物語』補注、野村真次『湖月抄』(武蔵野文学)二 古語釈から見た源氏物語)詳しく説かれる。未修正を次印本と見做し、差あり、後頁では、書屋 八尾甚四郎を「吉田四郎右衛門」と替える。勿論、掲出本には「吉田四郎右衛門」の名が見える。

(2) 地意を著して名高くと、政財界に強い影響力を持った。反町茂雄『紙魚の首飾り』

や川瀬一馬『日本における書籍集蔵の歴史』などに、古書籍との関連から種々の逸話が語られており、その人となりを知る上で、公式的な伝記よりはるかに面白い。



## 「秋草蒔絵螺鈿歌書筆筒」について

文化財学科 教授 加藤 寛

鶴見大学附属図書館の保管する貴重書は全国でも有数の質の高さを誇っている。とくに、源氏物語に関する奈良絵本や写本などに優れた作品が見られる。それらの資料のうち書籍単体のままで保管されているもののほかに、本資料のように蒔絵や螺鈿で飾られた筆筒に収められているものもある。本資料は正面に慳貪式の扉をつけ、天板中央に銅製の提環と扉上部に鍵金具を止め、内部に抽斗を設けた大名調度（家具）の様式をとどめている。蒔絵は蓋表、側面、背面などに「都忘れ」や「仙翁」などの秋草を金銀の蒔絵で表し、その上に蒔絵と螺鈿で物語の表題を散らしている。17世紀後半に大名の息女が入輿の際に、飾り棚や手箱とともにこの歌書筆筒を製作したと考えられる。この歌書筆筒には姉妹のような作品がある。静嘉堂文庫美術館保管の古今和歌集を納めた「蒔絵螺鈿歌書筆筒」である。器形やほとんど同じ文様でまとめられた装飾など、同じ工房の作例といえる。17世紀後半にはこのような華やかな歌書筆筒が大名の息女の教養の高さを示す道具として婚礼の儀式を優雅に飾っていたわけである。

桃山時代から江戸時代中ごろにかけてよく使用される文様に「仙翁（せんとう）」がある。一見すると「撫子（なでしこ）」と勘違いをすることがある。仙翁は丈が1mにもなる背の高い花で、蒔絵では表現することができないが、鮮やかな赤い花びらを風に揺らして咲きほこる。撫子に見える花の背景に垣根が描かれれば100%仙翁である。丈が高いため垣根に縛って鑑賞したのだろう。当時の能装束や狂言衣装などに多く使用されているので作品の鑑賞時には気をつけたい。

このたび、附属図書館のご厚意で文化財学「文化財演習Ⅲ」の授業の中で保存修復を行うことになった。詳しい保存修復報告は文化財学専攻の2名の大学院生が行っている。修復作業についてはそちらを参照されたい。



歌書筆筒 正面



歌書筆筒 背面

## 損失・欠損部分の復元及び、前扉八双金具の鉾穴への埋木作業について

鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻  
博士前期課程1年 新井菜穂子

歌書箆筒の修復において最も難しかった作業は、クリーニングと欠損部分の復元であった。特に失われた部分を再現することは非常に難しく、作品自体の雰囲気を壊す危険性を孕んでいるため、慎重に進めた作業であった。欠損した塗膜を新たに作り、全く同じ形を整形して段差の無いように貼付けるという行程で作業を進めた。歌書箆筒に負担を掛けないように貼付けるのは生地への露出が激しい2箇所と最小限にした。また使用する塗膜も曲面に添わせやすいように柔軟性を持ったものを新たに作成せねばならなかった。そのため、クリーニング作業と同時進行で適当な塗膜作りのため試作を繰り返した。結果、美濃和紙を3枚糊漆<sup>i</sup>で貼合わせたものに生漆<sup>ii</sup>を塗った塗膜が柔らかさ、色ともに適していると判断し使用した。塗膜の貼付はクリーニングと摺漆による塗膜の強化の後に行った。

まず、生地への露出した箇所に希釈した漆を染みこませて生地を固定し強化した。続いて、大きくえぐれた部分を刻苧漆<sup>iii</sup>で埋め後、錆漆<sup>iv</sup>で表面を平滑にした。この際に塗膜を貼ったときに平になるようにするため、塗膜一枚分の厚みを計算して0.3mm程下げた状態で平にする事が難しく、また欠損部分の断面はなだらかな坂にしてやり、より周囲の塗膜と一体になるように心掛けた。一方、貼り付ける塗膜は、和紙で予め型を取っておき、それを新たに用意した塗膜に糊で貼り、切抜き水で和紙を取ればおおよそはできあがった。加えて、更に精度を上げて形の微調整をし、周囲の塗膜と一体になるよう塗膜の縁を砥石で慎重に研いで薄くし塗膜の中心に向かって段々と厚くなる形にした。

塗膜の歌書箆筒への貼付は麦漆<sup>v</sup>で行い、周囲を汚さぬように注意して進めた。歌書箆筒への負担を避けるために塗膜より少し大きめに切った塩化ビニールシートをのせて、ビニール紐で固定し、圧着させた。この時、貼ったばかりなので動きやすい塗膜がずれないように紐を巻く作業が思いの外難しく、苦戦した。塗膜の色の調子については、長い年月を経ると色素が薄くなり下地の色が透けてくるという漆の特性を考慮して塗膜を作成したため、今の段階では色が濃くなっていることを念頭に置いて頂きたい。

塗膜の復元と時を同じくして、前扉八双金具の失



図1 正面下部 塗膜貼付前



図2 背面左下部 塗膜貼付



図3 背面左下部 塗膜貼付後

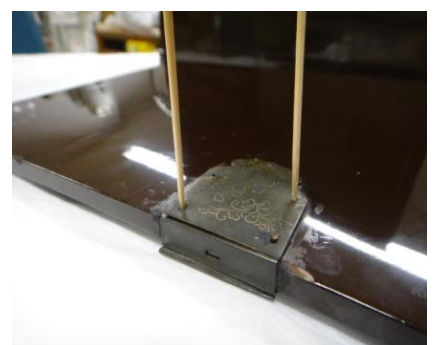


図4 蓋裏 八双金具 埋め木

れた鋸の穴の埋め木を行った。鋸が失われているために金具が動き、表面を傷つけているので、その防止を目的としたものである。鋸穴の大きさに合わせた竹串を刻苧漆で埋めた穴に入れて固定後竹串を切り、錆漆で穴を平にして、一見した時に目立たぬ様に配慮した。

以上がこの度の修復の作業だが、何れも気の抜く事のできない作業が続いた。一つでも怠けた仕事をする次の作業に支障がでて、美しい仕上がりは到底期待できない。また、修復する作品一つ一つ状態が異なるので、今回通用したことが次回も同じく通用するとは限らないので、対象物に合った修復方法を常に模索して行かなければならない。より良い修復をするためにもっと経験を積んで精進して行きたいと思う。

- i 澱粉糊と生漆を混ぜ合わせたもの。
- ii 漆の木から採った樹液を濾過したもの。
- iii 生漆と水練りした小麦粉を混ぜ合わせた漆に木粉を合わせたもの。今回の修復では#70の木粉を使用。
- iv 生漆と水練りした砥粉を合わせたもの。
- v 生漆と水練りした小麦粉を混ぜ合わせたもの。

## 草葎絵歌書箆筒の修復について

～損傷箇所とクリーニング及び摺漆作業～

鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻  
博士前期課程1年 大多和弥生

修復前の「秋草葎絵螺鈿歌書箆筒」の損傷状況は、長い年月に蓄積された汚れが表面全体を覆っていた。扉の四隅には漆塗膜が欠失し、木地の露出した箇所も認められた。この作品をより長い間保存し、後世に伝えるためにはこれらの損傷箇所を修復することが必要不可欠である。今回の修復作業はクリーニング、天板の摺漆、欠損部分に復元を施した。(図1)

修復作業はまず、クリーニング作業から取り掛かった。クリーニング作業の目的は作品の表面に蓄積された汚れを取り除くためである。汚れが残ったままでは次の修復作業で用いる漆に支障をきたしてしまうからである。

まず作業に用いる溶剤を決めるために溶剤テストを行った。溶剤テストには精製水、無水エタノール、リグロインを用いた結果、精製水と無水エタノールが適していると判断した。リグロインとは純度の高い石油系試薬のことである。精製水と無水エタノールを綿棒と木綿布に含ませ表面の汚れを取り除いた。(図2)



図1 秋草葎絵螺鈿歌書箆筒



図2 クリーニング作業

今回の修復ではクリーニング作業が他の作業より非常に時間がかかってしまった。長い時間をかけて蓄積された汚れを取り除くためには、地道にひたすらクリーニングし続けるしかなかった。汚れはいくつかの層で形成されていたため、木綿布に付着する汚れの色が少し薄くなったと思えばすぐに次の汚れの層が表面に表れ、木綿布に褐色の汚れが濃く付着することもしばしばあった。

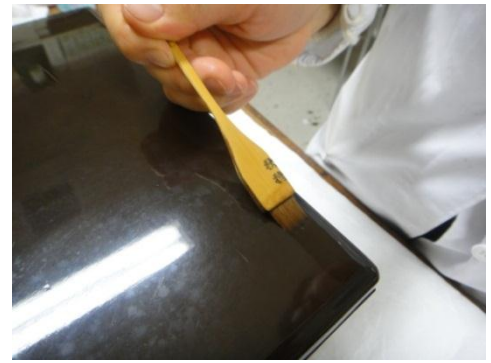


図3 天板の摺漆作業

クリーニング後、天板が他の面に比べて漆塗膜の艶が引けていた。塗膜の艶の度合いを他の面に合わせるとともに、天板に見られる白色のカビ跡からの更なるカビの増殖防止のため「摺漆」を行い、塗膜の強化を行った。「摺漆」とは漆を表面に摺り込む作業のことである。(図3)

この作業は生漆をリグロインで1:1に希釈し、溜刷毛と蒔絵筆で塗布した後、木綿布で拭ききった。漆を塗布する係と塗った漆を拭き取る係の二手に分かれ作業を行った。漆はリグロインで希釈しているので蒸発が早く、塗った漆はすぐに拭き取らないと塗り跡ができてしまうため、なるべく2人の作業を合わせて行うことが必要だった。

この後の作業に関しては新井氏が細かく書かれているので割愛するが、この後の作業も気の抜けない作業が続き、作業は閉館時間まで及ぶことが何度もあった。

今回の修復を通して、修復技法の困難さを改めて痛感した。過去の修復事業を見ながら修復方針の参考にしたものの、作品が経験してきた環境は様々であり、且つ、目に見える損傷はそれぞれ異なっているので対応の仕方もまた作品一つ一つ異なってくる。作品をしっかりと見つめ、現状を把握することが保存修復に必要なだということをより深く理解することができた。

最後に、秋草蒔絵螺鈿歌書筆筒の修復の機会を与えて下さった鶴見大学付属図書館の皆様、修復の方針や作業に関してご助力を賜りました加藤寛教授、先輩方に歌書筆筒の修復を無事に終えることができたことをこの場をお借りして篤く御礼申し上げます。

## 編集後記

\*今号のアゴラ巻頭には、歴史小説作家・永井路子先生の随筆を掲載できた。永井先生のご夫君・黑板伸夫先生は、かつて本学で非常勤講師として教鞭を執られ、永井先生ご自身も当館の展示に足を運んで下さった。厚く御礼申し上げます。

\*加藤寛先生が解説文を寄せられた当館所蔵の「秋草蒔絵螺鈿歌書筆筒」は、新井さん、大多和さんらをはじめとする文化財学科院生の修復作業により、見事に往時の姿を蘇らせた。今後こうした授業連携が進んで欲しい。

### 目次

1. 門も叩かず 永井路子
2. 薄様刷特製本『湖月抄』 日本文学科 教授 高田信敬
3. 「秋草蒔絵螺鈿歌書筆筒」について 文化財学科 教授 加藤寛
4. 損失・欠損部分の復元及び、前扉八双金具の鉸穴への埋木作業について  
鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻 博士前期課程1年 新井菜穂子
5. 草蒔絵歌書筆筒の修復について ～損傷箇所とクリーニング及び摺漆作業～  
鶴見大学大学院文学研究科文化財学専攻 博士前期課程1年 大多和弥生